

## 「応用哲学・分析アジア哲学プログラム参加報告書」

京都大学文学部 4年 佐々木尽

今回、2014年2月に行われたシンガポール派遣に続いて、台湾派遣にも参加でき、大きなトラブルもなく日程を過ごせたことをまず報告する。派遣の前後に、KUASU 支援室の方々や出口准教授に非常にお世話になったので、感謝を申し上げたい。

今回の派遣は台湾の3つの大学（政治・陽明・清華）での哲学カンファレンスに出席すること、並びに清華大学での日本語授業に参加することを主なプログラムとしていた。3つのカンファレンスを経て感じたこととして最も印象的だったことは、同じ「哲学」の名の下で学ばれていることが、日本と台湾の3つの大学とでは大きく異なるということだ。私の属する哲学研究室では、経済学の哲学や、仏教の哲学を学ぶ学生は非常に少ない。分析アジア哲学という分野も、専門として多くの学生が取り組んでいる分野ではなく、新しく登場した分野といえる。しかし台湾の学生は積極的にそれらの研究を行っている。日本で、京都大学で学ぶ「哲学」と、台湾の3大学で学ばれている「哲学」とに大きな差異を感じた。また併せて、哲学の研究には、未だ見ぬ大きな可能性が秘められているのではないかと、とも感じ、留学を含めた外国での研究というものに対して強い関心を抱く契機となった。

日本語の授業では、私は京都の文化や現代の街並み等についての短いプレゼンテーションを行った。英語ですべてを発表することに較べれば幾分難易度は下がるだろうが、短い時間で、日本語のまだまだ不自由な学生相手に発表内容を伝えることがいかに難しいかを思い知った。今回の話題は哲学のいわゆる「難しい」話題ではなかったからまだ良かったものの、これが哲学の専門的な発表となれば、増してや発表がすべて英語となれば、格段に難易度が上がるだろうし、それに向けて各勉強・研究を進めていきたいという意志を持つきっかけとなった。

哲学カンファレンスだけでなく、日本語授業でできた友人とも授業時間外等でたくさん交流し、台湾の文化、建築、気候、食など、多くのことを教わった。英語や日本語、中国語を織り交ぜてコミュニケーションをとり、一つの言語に固執しない、伝えることに重点を置いたコミュニケーションの仕方の一端を垣間見たように感じた。また SNS 等で引き続き交流できる状況にあるので、これからも多くのコミュニケーションをとっていきたい。

2月に行われたシンガポール派遣と併せて、今回の台湾派遣を通じて、以前から未来図の片隅にあった留学という選択肢が、以前と比べて大きく現実味を持って目の前に現れてきたように感じている。専門的な研究だけでなく、語学など、まだまだ未熟で勉強しなければならないことも多いが、それらの研究・勉強のモチベーションとしても、今回の派遣は非常に有意義だったといえる。最後に重ねて、KUASU 支援室の方々や出口先生、このプログラムに関わっておられた多くの方々に感謝したい。

佐々木尽